

岐阜月朋

ぎふづうぼう

- ~沖縄と親鸞、そして私~
- 「同朋の会」ノススメ
- 福證寺の大きな掲示板
- コラムしょうしんげ
- My Book

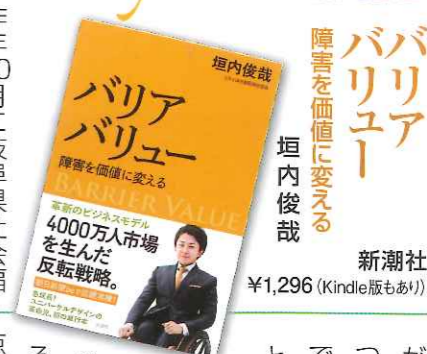
2019.07 121



金城 實氏

沖縄

MyBook



バリアバリュー
障害を価値に変える
垣内俊哉
新潮社
¥1,296 (Kindle版もあり)

昨年10月に岐阜県社会福祉大会が開催され、その記念講演を聞く機会がありました。講師は、株式会社三口イロ代表取締役社長垣内俊哉氏で、演題は「バリアバリュー 障害を価値に変える」。長良川国際会議場のメインホールで、だれ一人居眠りされていなく、背筋を伸ばし聴講されている姿、時には涙を拭かれる姿にも感動いたしました。

垣内さんは、1989年に愛知県で生まれ岐阜県で育ち、生まれつき骨が脆く折れやすい骨形成不全症という体で、車椅子での生活を送らざるを得ない方です。「歩けなくてもできること」

があるそんな思いからいつしか「歩けないからこそできることがある」。すつと車椅子に乗ってきたから、社会に隠れている不便さや不自由さに気づけるのではないかと。高さ106センチの世界で生きていくから、他の人とは違う視点で物事をみられるのではないかとという観点から株式会社三口イロを立ち上げられました。

この本の中で、松下電器の創業者である松下幸之助さんが成功した理由の三つの条件は、貧乏だったから一生懸命働こうと思ひ、わずかな給料でも感謝できた。学歴がなかったから他人に素直に教えてもらおうと思ひ、体が弱かったから人の能力を信じて、人に任せることができた。と印象的でした。



「業務上の資格として、得度ということとは考えられないのかね?」
不況のまっただ中で社会に放り出された著者は、ひょんなことから浄土真宗の靈園に就職し、状況に流されるままに保身のために僧侶になつた。けれども、そこは「お東

紛争」の影響が色濃く残る、矛盾に満ちた場であった。人生で二度の得度を果たした「特殊事例」の著者が、本願寺維持財団と真宗大谷派という二つの教団に身を置いた経験を通して、僧侶とは誰か、仏法が息づく僧伽とは何かを問いかける。「もつ、何者かになるために、何かを求めて生きる必要はない。この身ひとつあるという事実に立って、お念仏とともに堪え忍んでいくことが出来るだろう。私の心の奥底には、静かな海がどこまでも広がっている。」

著者が浴びせられた「二七坊主」という言葉が契機となつて、真宗に限らず、僧侶に限らず、すべての宗教者に、そして無宗教であると思つている人にも、「自分は一体何であるのか?」を問いかける本である。

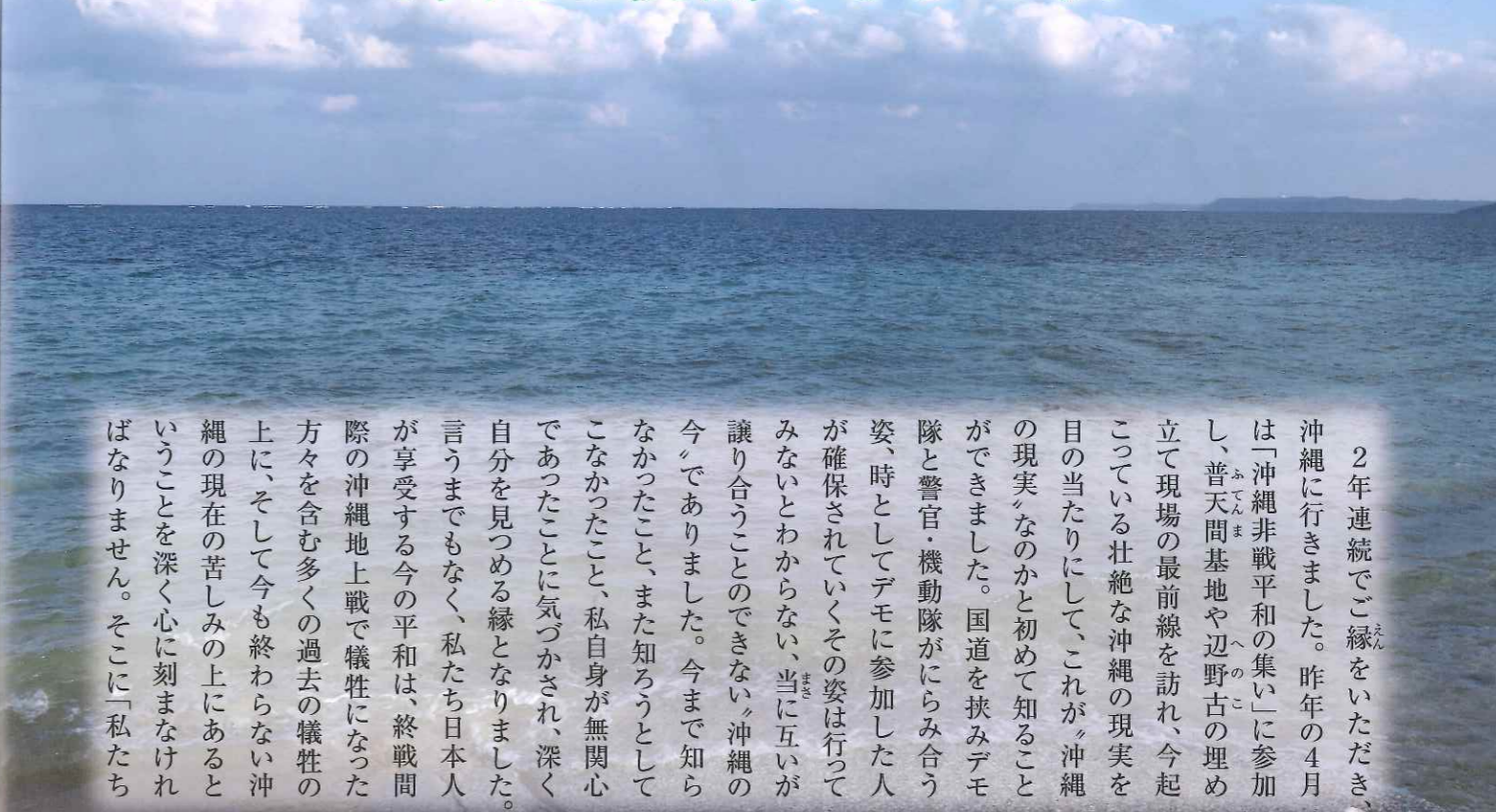
なお、本書は紙媒体ではなく、デジタル書籍。アプリ(App)をダウンロードして、端末機でお読みください。

日本人は代々「和」を大事にしてきました。
聖徳太子は、「和」を「やわらかなる」と理解し、最も貴いものとし、仏教精神の神髄とされました(和をもって貴しとなす)。物事にとらわれない包み込むような心で何事もまず受け入れ見捨てない、「損取不捨」です。柔軟心といつても良いと思います。「浄土論」では、「法蔵菩薩の願心によって柔軟心を得る菩薩は衆生を巧みなでたて(方法で摂めとり教化する事ができる(善巧摂化))とされています。和は、思いやりの心でもありません。相手の気持ちに寄り添う心です。孔子は「恕」という言葉で表現しました。「かわいそう」といった上から目線の心ではありません。
石田三成の三杯のお茶の話は、ご存じでしょうか。相手を思い今の自分に何が出来るか考え寄り添った上でのお茶は人の心に響きます。でも、凡夫には思いやりの心は無理なんでしょうか。いや、仏の世界からの利他行(還相の菩薩の働き)の心は開かれていくと思ひます。これを「普賢行」といいます。(昭)

編集後記

青い空とエメラルドグリーンの海に秘められた悲しい過去たち。

～沖縄と親鸞、そして私～



2年連続でご縁をいただき、沖縄に行きました。昨年の4月は「沖縄非戦平和の集い」に参加し、普天間基地や辺野古の埋め立て現場の最前線を訪れ、今起こっている壮絶な沖縄の現実を目の当たりにして、これが沖縄の現実なのかと初めて知ることができました。国道を挟みデモ隊と警官・機動隊がにらみ合う姿、時としてデモに参加した人が確保されていくその姿は行つてみないとわからない、当に互いが譲り合うことのできない、沖縄の今でありました。今まで知らなかったこと、また知ろうとしてこなかったこと、私自身が無関心であったことに気づかされ、深く自分を見つめる縁となりました。言うまでもなく、私たち日本人が享受する今の平和は、終戦間際の沖縄地上戦で犠牲になった方々を含む多くの過去の犠牲の上に、そして今も終わらない沖縄の現在の苦しみの上にあるということ深く心に刻まなければなりません。そこに「私たち



また、今年は、1月23日～25日の3日間、「同朋社会推進委員会委員交流会」に参加し、ハンセン療養所宮古南静園を訪れ、宮古島での差別的な政策による隔離と空襲による被害という二重の困難の歴史について学ばせていただきました。周知のとおり、ハンセン病は、かつて日本では「らい病」と呼ばれ、病気を正しく理解されていない時代において、その外見や感染への恐怖心などから、患者への過度な差別と偏見、排除が国を挙げて行われました。その後さらに「らい予防

法」(昭和28年)において治療・福祉の名のもとに患者は全国の療養所に強制隔離し、日常生活・社会生活から分断されていたという歴史があります。我が大谷派教団は、他の仏教宗派に先んじて、これらの国の政策に積極的に加担し、この政策の安定的な実現のために、患者に「阿彌陀如来のご本願」が差別や偏見或いは戦争に利用されていた過去の歴史をしっかりと学ぶことで、今をどう生きるか、未来をどう生きるか、ご本願とは何を願ってくださっているのかを常に南無阿彌陀仏のお念仏のところに問い続けていくことが大切だと深く感じさせられたことでした。



宮古南静園で、「全国ハンセン病退所者の会」会長の知念正勝さんの話を聞くことができました。知念さんは18歳の時、父親に何も知らされず南静園に連れてこられて、自分一人を残して父が帰ろうとしたとき、後ろから「お父さん、お父さん」と声をかけても振り向いてもくれなかったことを8歳を超えた今でも忘れることができないとおっしゃっていました。



また、縁あって所内で結婚し、子どもを授かることができたのですが、ハンセン病患者は子どもを産んではいけないとの規則のもと、墮胎をすることを余儀なくされた話、たまたまその処置が失敗し、子どもを授かることができた話をしてくださいました。病気の苦しみともう一つの差別・隔離、耳を疑いたくなるような厳しい訓練、人間として生きることができなかった苦しみ、故郷や肉親から追われる辛さ、お骨になってからも生まれたところに帰ることが許されなかった現実、所内には、帰ることができなかった人たちのための火葬場、そして納骨堂がありました。



私たちが人間とは本当に恐ろしい生き物です。自分が正しいと信じきる事がいかに危険なことか、いかに人を傷つけているかがわからないのです。私たちは、念仏の教えを聞くことによって、知らない、知ろうとしないことが本当に罪深いということに気づかされるのです。念仏者は、過去の過ちをもう終わらせたことだといわんばかりに、臭いもの(都合の悪いこと)にふたをするわけにはいかないのです。24年前オウム真理教のおこした地下鉄サリン事件が、13名の死刑囚の死刑執行を期に? 天皇の代がわりに? - テレビ・新聞でほとんど語られなかった今年の3





「同朋の会を開きたいけど何をすればいいの?」「そもそも同朋の会って何?」という声を耳にします。

宗門では1962年(昭和37年)、一人ひとりが親鸞聖人のお念仏の教えを聞くものとなっていくことを願いとして真宗同朋会運動が始まりました。その中では教えを聞き語り合う場として、お寺や地域や職場に「同朋の会」を結成することを一つの目標としてきました。

岐阜教区でも、2018年2月に同朋の会に関するアンケート調査を行い、今年度の教化研修計画にも「同朋の会の結成・促進」を掲げています。

このアンケートには、241ヶ寺中157ヶ寺から回答をいただき、67ヶ寺が同朋の会を開いていることが分かりました。また、開いていない寺院の中でも52ヶ寺が「開きたい」と答えてくださいました。

まず、そのアンケートの結果についてご紹介いたします。

●講師について

ほとんどが住職・寺族。2ヶ寺が寺院外から講師を招いている。また法話・講義なしで座談会のみを行っている寺院あり。

●代表者について

多くが住職・寺族であるが、門徒が同朋会会長、もしくは推進員や総代が代表をつとめている寺が15ヶ寺。

●内容について

お勤め・法話・座談が基本形。その他、特徴的な内容としては、境内の清掃奉仕、茶会・食事会(お斎)^{ちき}・懇親会などがある。



●テキストについて

もつとも多く学ばれているのが「正信偈」で、赤本や「書いて学ぶ親鸞の言葉 正信偈」がテキストとして使われている。また、「書いて学ぶ親鸞のことば 和讃」をテキストに和讃を学んでいるお寺もある。その他は、「御文」^{おのみ}、「歎異抄」^{たんにしやう}、同朋新聞、お内仏のお給仕に関するもの(「真宗の仏事」など)や、講師作成のレジュメなどもある。

●開催頻度、時間について

開催頻度は年1回から毎月1回までさまざま、時間帯は講師・代表である住職の都合による時間が多い。専業の寺院は朝、もしくは昼、兼業の寺院は夜になることが多い。朝6時からのお寺もある。

●参加者について

それぞれで開きがあるが、2~5人の少人数でも数十年継続している寺院あり。

このように「一口に「同朋の会」と言っても、お寺の状況によって形は

違います。アンケート外の聞き取りでも、お寺以外で公民館などを会場にされているところや、仲間内で勉強会をしていると答えてくださった方もありました。また、日曜学校を「子ども同朋会」だとする考え方もあります。あらためて「同朋の会」とは何かと考えさせられます。

同朋の会については全国的な課題であり、今年1月に開かれた全国駐在教導研修会でもこのことについて話し合いが行われました。そこで同朋の会が成り立つ条件として見出された項目は以下の3点です。

- 1 つめは、誰もが参加できて、自分を表現し、話を聞き合う場であること。
- 2 つめは、信頼でき、安心してやる場であること。
- 3 つめは、本当に大切なこと・尊いことを見出され、かたちとなった「本尊は大事であるということ」。



ややもすれば、同朋の会は最初から聞法学習しなければならぬような、堅苦しい、ハードルの高い集まりだと思ひ込みがちです。しかし、同朋の会は「こうあるべき」という固定観念を外して、「こうありたい」という願いのもと、見出された3つの要件が重なるならば、子ども会も、婦人会も、お斎でのおしゃべりの場も、同朋の会と呼べるのではないのでしょうか。

※宗派ウェブサイト「浄土真宗ドットインフォ」の記事より引用

でしょう。

教区教化委員会では、まだ「同朋の会」を開いていないお寺もぜひ場を開いていただきたいと願っています。お寺の状況にあった形のものがあると思いますが、参加者の多い少ないにかかわらず、工夫をしながら「同朋の会」を続けているお寺を「岐阜同朋」誌面にてご紹介できればと考えています。



ふくしょうじ 福證寺の大きな掲示板

羽島郡笠松町にある福證寺は、木曾川の堤防沿いの道路に面し建っています。その道路に向かつて高さ180cmほどもある掲示板が設置されています。散歩する人や車を運転する人が移動しながらでもはつきりと読むことができるくらい大きな掲示板です。



2008年(平成20年)に福證寺の御遠忌の稚児行列募集のために建てた看板が現在の掲示板の前身となつて、御遠忌を終えた後から現住職の岩越智俊さんが法語を書いて貼り始めました。その後、傷んだ掲示板を何度も修復しながら、2017年4月に新たに特注で作られたそうです。

堤防沿いの道は通勤で通る人も多く、日常の中で抱える悩みに、「こんな考え方もあるんだよ」とメッセージを込めて言葉を選びます。移動中では、長い文は読み切れないので、短い言葉で、また、生活感覚に響くように芸能人や詩人などの印象深い言葉を選び、字の形を変えてみたり、イラストを入れてみたりとさまざまな工夫を凝らしながら住職自ら文字を書かれています。



福證寺の掲示板はこれだけではありません。他に境内の内と外に3つの掲示板があるので、山門の前と境内裏のお墓にある掲示板は、行事の告知を合わせて、ご先祖や亡き人を想うような言葉を、境内本堂正面にある掲示板には、お寺参りをされている方に向けて、言葉の意味を深く考えてもらうような法語がそれぞれ選ばれています。これらの法語は1ヶ月から1ヶ月半くらいで貼り替えておられるそうです。



しかし、岩越さんは、これから4つの掲示板は「入口」だと語ります。常飯(月命日のお参り)での対話や寺報なども含めて、教えに出遇うきっかけとなるような縁を入り口として、このような場をできるだけたくさん作りたくらいと語ってくださいました。

また、寺では、毎月、「同朋の会」と祥月を対象とした「永代経法要」があり、この二つの継続した聞法の場を大切にされています。聞く耳をもった状態で、教えを深く確かめることができるこのような場を「出口」と表現されます。

「寺に入ってきてくださった方にきちっとお伝えできるようにしたい。そのために自分の中の課題を持ち続けている」と。入り口から出口への道筋を、丁寧に、そして熱をもって作られている姿が印象的でした。

しょうしんげ

一切善悪凡夫人
聞信如来弘誓願
仏言広大勝解者
是人名分陀利華

どんな人であっても、阿弥陀仏のご本願を聞き信じる時、お釈迦さまはその人を真理に目覚めた者とほめられるでしょう。その人のことを白蓮華(穢れない美しい花)と名付けます。(私訳)

新元号が決定し、「平成」から「令和」となりました。「令」ときくと命令(オーダー)を思い浮かべます。

「令和」とは、命令を聞きその命令のもとで、皆が和す・調和する(Harmony)という意味なのかな?と思いきや、なんと「令」の意味は、令月・令嬢などに使われる「美しい」(Beautiful)という意味だと聞かされ、「令和」が「Beautiful harmony」という意味であることを知りました。とても素敵な元号ですね。

それでは、美しい人とはどんな人でしょうか。どんなに見た目が美しくても、人間は心の中で分別・排除の心がたらくことを否定できません。本当に美しい人とは、自分がそんな穢れた心を持った存在であることを教えた人のことだと思えます。

汚れているからこそ清らかで美しいものを求め続けるのではないのでしょうか。そんな濁りに塗れた私を悲しんで静かに寄り添ってくださいるのが仏様だと思つたのです。